

シルヴィアの恋人たち (3)

エリザベス・ギヤスケル 作

大野龍浩 訳

第4章 フィリップ・ヘップバーン

イングランド島の中で、この物語の舞台となっている地方の海岸は、岩や崖が切り立っている。この海岸に隣接する内陸地は、平坦で起伏がなく吹きさらしになっていて、ここで、芝土の低い境界壁で囲まれた、長々と広がる平原が突然切れて、急降下する。初めて来る人には、砂浜に波が打ち寄せている様子が遙か眼下に見えるから、自分がどんなに高い所にいるのかが分かるというものだ。前に申し上げた通り、平坦な陸地には裂け目が発生していて、水はこれを通して切り立った岬から海に流れ落ちる。この裂け目は、ワイト島では“chine”〔深い小峡谷〕と呼ばれているものである。けれども、ワイト島で吹く、樹々の茂った峡谷をそっと吹き上げる穏やかな南風、とは違って、ここでは、東風がこれらの北方峡谷の中をひゅーひゅー吹き抜け、側面で生長しようとする木々の生長を、低木の茂みの高さ程に抑えている。これらの峡谷を通して海岸に下る道は大概急勾配で、荷車は勿論、馬さえも通れない程である。しかし、人間は、そここの岩に刻まれた僅かな石段を伝って、た易く上り下りが出来る。

6・70年前は（随分時代が下ってからは言うまでもない事だが）、このような絶壁の真上にある土地を所有、あるいは借用している農夫は、密輸入と同じ事をしていた。尤も、その範囲は、イングランド北東沿岸に8マイル〔約14.8キロ〕のほぼ均等間隔で配備された、沿岸警備隊の取り調べを受けない程度の事ではあったが。海岸に打ち寄せられた海草は、いつでも良質の肥料であって、

それを大きな柳細工の籠に入れて上まで運んで、農作物の肥料にする事は、法律では禁じられていなかった。奥まった所にある岩の裂け目には、秘密の品の海草がたくさん入れてあり、それがなくなると、農夫は、信用出来る人間を海岸まで遣わして、自分の農地に十分な量の砂と海草を取りに行かせるのだった。

この絶壁の上にある農地の一つを最近借りた男に、シルヴィアの父親がいた。彼は、船乗り、密輸業者、博労、百姓の順に、かなり職業を転々とした男だった。冒険心と変化を愛する心に憑かれ、そのおかげで、誰よりも自分と家族に害を齎すような、そんな男だった。回りの誰もが非難しながら、誰もが好きになるような、正にそんな類いの男だった。かなり年を取ってから、農夫ロブスは結婚した（というのは、彼は無思慮な男で、家族を設ける事については運に任せて結婚するのが一般的であるような、そんな階級の一人だったからである）。相手の女は、彼のような男を夫に選んだからには、実際的な知恵を欠いていたとしか思えない。ロブスの妻になった女は、フィリップ・ヘップバーンの叔母で、男やもめの兄の家から嫁ぐまで、フィリップの面倒を見ていた。ヘイターズバンク農場が貸しに出されているのを彼女に知らせたのがフィリップで、博労の仕事で相当打撃を被った後だから、叔父が落ち着くには手頃な土地だと、彼は考えたのだ。母屋は、草原が僅かに窪んだ所にかくま匿われるように建っていて、屋根の高さが回りの牧草地の下にほぼ隠れていた。短く切り揃った芝が、母屋の戸口や窓の間近にまで広がっていたが、隣接する庭には無く、芝が生えているのは、牧草地の境界を示す石壁までで、それよりも内側にはなかった。屋敷内の建物が長くて低くなっているのは、荒涼としたその場所に冬と夏に吹き荒れる暴風を避ける為だった。母屋の住人にとって好都合だったのは、木炭がとても安い事であった。そうでもなければ、ひゅうひゅう吹き捲って、どんな隙間からでも家に入って来るような身を切るような強風に、耐えて生き残れるはずが無いと、南部地方に住む人なら思った事だろう。

しかしながら、球形のごつごつした石がたくさん転がっているだらだらと続く吹きさらしの（不慣れた馬なら脚を挫いてしまう程の）道を上り、卓越風に

まともに向かわなくて済むようにジグザクになっている乾燥して固くなった小径を通して、牧草地を横切った事が一度でもある者には、母屋の内部は十分暖かく感じた事だろう。ロブスン夫人はカンバーランド〔イングランド北西部〕出身だった。それ故、北東海岸地方の農夫の妻よりは綺麗好きだったものだから、彼女たちのやり方にショックを受ける事がしばしばあった。ロブスン夫人は言葉よりも顔付きで不快感を表した。余り口数の多い人では無かったのである。そのような潔癖さのおかげで、夫人の家は極めて居心地良くなったが、夫人に対する隣人たちの評判は悪くなりがちであった。実際、夫人は、自分の家事のやり方全般を自慢した。なるほど、家そのものは灰色で剥き出しの石造りなのに、中に一旦入ると、清潔さと暖かさは勿論の事、望み得る限りの、生活を快適にする物がたくさんあった。叩いて延ばしたパンを置く大きな棚が頭上に掛かっており、ヨークシャーで使われる発酵させてやや酸っぱくなっているものよりも、この種のオートケーキをベル・ロブスンが好む事も、彼女の評判を悪くする一因であった。豚の脇腹肉や“hands”と呼ばれる乾燥した豚の肩肉のベーコンや、高価で売れる、商売用の豚の両脚や腿の肉が、豊富にあった。宿泊出来る訪問客には、クリームも、最良質の小麦粉も、ふんだんに使って、“turf cakes”〔泥炭を燃やした灰の中に蓋をした鍋を入れて焼くお菓子〕と“singing hinnies”〔円い鉄板の上で焼く時にジュウと音を出すお菓子の一種〕を作り、大切なお客が薫りの良い砂糖を溶かした高級茶を味わっている時に、それを出してもてなすが、北部地方の主婦の喜びなのである。

今宵、農夫ロブスンは、いらいらしながら戸口を出たり入ったりしていた。牧草地の小高く盛り上がっている所に登っては、がっかりして下りて来て、今にも癩癩を起こしそうだった。口数の少ない妻の方も、シルヴィアの姿が見えない事に少しばかり戸惑いの色を見せていた。彼女は、「シルヴィアは何処で道草食つとるのか？」と夫から耐えず発される問いに、いつもより素っ気なく答えたり、特別に精を込めて編み物をする事で、心配している様子を表していた。

「わしが、モンクスヘイヴンへ下りて行って、シルヴィアの様子を見て来よ

うかのう。もう7時ばい。」

「止みなさい、ダニエル。」と、夫人は言った。「行かん方が良いわ。脚の痛みがここ一週間取れんものだから、そんなに歩くのは無理よ。ケスタを起こして、彼をやらせましょう。迎えに行った方がいいと思うなら。」

「ケスタを起こす訳にはいかん。今晚奴を起こしたら、誰が、明朝早く草原に出て、羊を追うんか。奴はシルヴィアを見付けきらんで、居酒屋で一杯やるに決まっとる。」と、ダニエルがぶつぶつ零した。

「ケスタはそんな男じゃない。暗闇で人を見分けるのが上手よ。けど、それでもあんたが行くと言うなら、私がフード付きの外套を着て、径の端まで行ってくるよ。そのかわり、ミルクを見といてね。こぼれんように。少しでも焦げついたら、あの娘が飲めんごとなるから。」

ところが、ロブスン夫人が編み物を片付けてしまわないうちに、径の下の遠く離れた所から人の声が聞こえて、だんだん近付いて来た。ダニエルはもう一度小高い丘に登って、下を見、耳を傾けた。

「大丈夫ばい！」と言うと、彼は脚を引きずりながら駆け下りてきた。「シルヴィアを探しに行く支度なんかせんで、じっとしてろ。ありゃフィリップ・ヘップバーンの声に間違いなか。あの娘を家まで送って来たとばい。一時間前に、わしが言った通りたい。」

ベルは返事をしなかった。本当は、『フィリップがシルヴィアを送って来てくれるかもしれんわね』と言ったのは私で、『そんなこたぁありえん』と否定したのはあんたじゃないの。」と、言ってやっても良かったのだが。一分後にシルヴィアが入って来ると、二人の顔はいつの間にか喜びの表情に変わっていた。

神無月の微風の中を長時間歩いて来た為に、シルヴィアの頬は真っ赤だった。今頃の空気は、夕方になると霜が降りそうなほど冷たいのだ。初めはシルヴィアの顔にはやや不愉快そうな表情があったが、両親の優しい目を見ると、それもすぐに消えた。フィリップは、シルヴィアを送って来たので浮き浮きしていたが、嬉しくてたまらないという様子ではなかった。叔父からは元気一杯

の挨拶を受け、叔母からは静かな挨拶を貰った。

「おい、ミルク鍋は下ろして、湯を沸かさんかい。女どもはミルクで良からうが、フィリップとわしは、オランダ製のジンのお湯割りを一杯貰おうか、えらう冷えるけん。お前を探しに外に出とったけん、体の芯まで凍えそうばい、のうシルヴィア。お前が明るいうちに帰らんけん、母さんがえらう心配して、わしが丘の上まで出て、聞き耳を立てとかんといかんだったとぞ。」

これは、全くの嘘だった。ベルはその事に気付いたが、ダニエルは気付いていなかった。こんな事は、これまでもよくあった。実際は自分の不安を取り除く為に、別の人間を喜ばせる為にしたのだと、彼は今信じ込んでいた。

「モンクスヘイヴンは、強制募兵隊と捕鯨をやっている町の人が一悶着を起こして物騒だから、シルヴィアを送って行く方が良いと思ったんです。」

「よかよか、フィリップ。一杯やりたかなら、釈明せんでも、いつでも来な。ところで、捕鯨船が何だつて？ 捕鯨船が入港しとるんか？ 昨日、海岸に下りた時にゃ、見えんかったがな。入港するにはまだ時期が早い。強制募兵隊めが、また悪さばしよつか！」

ダニエルの顔の色が変わり、昔の憎しみを思い出すと必ず出て来る、あの激昂した顔付きになった。

「おい、ベル、ええか。わしは、お前だろうと誰だろうと、言葉は選ばん、あの募兵隊めの話をする時やな。わしは、自分の言う事を恥とは思わん。みんな本当の事だし、いつでん証明してやる。わしの人差し指は何処に行った？ え？ 人間にゃ誰にも付いとる、親指の第一関節よりか先や何処に行った？ アルコール浸けにして取っとくと良かったなあ、薬屋でやっとなるみたいに。そしたら、逃げる時にわしが犠牲にした骨と肉を、シルヴィアに見せられたとになあ。わしは、斧を振り上げたんじゃ。あの時、わしは海上を進む軍艦の上で足を踏ん張とったと思う。——あれはアメリカとの戦争の時だ。奴らに殺されるなんて考えるこたあ我慢出来んだつた、わしなりの言い方をすればな。——だから、わしは斧を振り上げたんじゃ。そして、ビル・ワトスンに言うた。『おい、俺を逃がしてくれるなら、殺さんでいてやろう。怖がる事はない。そうすれば、

奴らも、喜んで俺たちを見逃して、イングランドに送り返してくれるだろう。命令書を持って来い』ってな。こら、ベル、何でじっと座ってわしの話の聞いとられんのだ。鍋なんか放っとけ。」ダニエルは、気分を害して妻に言った。ベルは、耳にタコが出来る程その話を聞いているので、実を言うと、わざと音を立てながらシルヴィアの夕食のパンとミルクを用意していたのだ。

ベルは返事をしなかったが、シルヴィアがダニエルの肩を偉そうにポンと叩いて、こう言った。

「母さんが、あたしの為にやっている事よ、父さん。あたし、おなかぺこぺこなんだから。あたしを早く食卓に付かせて、グログ〔強い酒のお湯割り〕を一杯、そこにいるフィリップに用意して貰ったら、こんなにいい聞き手は二度と得られないよ。母さんだって、ゆっくり聞けるよ。」

「この、いけず！」そう言うと、ダニエルは豪快に笑って、娘の背中を大きく叩いた。「なら、はよ食事ばせい。そしてお前は黙っとれ。わしゃ、この話をフィリップにしまいましたか。ところで、フィリップ、わしゃ前に話したかいの？」彼はフィリップの方を向いて尋ねた。

フィリップは、まだ聞いた事がない、とは言えなかった。自分の誠実さに誇りを持っていたからである。率直にそう言うかわりに、彼は短い言葉を挟んで上辺を取り繕おうとした。ダニエルの傷付いた虚栄心を慰めようとしたのである。しかし、当然の事ながら、それは正反対の結果を招いた。ダニエルは子供の様にあしらわれた事に腹を立て、子供の様に拗ねて、フィリップに背中を向けてしまった。シルヴィアは、フィリップの事などどうでもよかったが、父親に気分を害された後の不快感が厭だった。それで、自分の冒険談を持ち出して、両親に今日の午後 of 出来事を話した。ダニエルは、初めは聞いていない振りをして、わざとらしく匙やコップを手にとって音を立てていたが、強制募兵隊の所業を聞くに及んで、だんだん興奮して来て、仕舞には、「なんで暴動の結末をもっと詳しく聞いて来んかったとか。」と、フィリップとシルヴィアを叱り付けた。

「わしも鯨を取ったんぞ。」と、ダニエル。「鯨捕りはナイフを身に付け

ると聞いてとった。だから、わしは、募兵隊に大型ナイフを見舞ってやっただろう、上陸した途端に襲われでもすればな。」

「僕には分からないな。」フィリップが口を挟んだ。「イギリスはフランスと戦争している。そして、負けたくないと思っている。それなのに、兵士の数がフランスに叶わないなら、負ける公算がかなり大きくなる。」

「そんな事あなか。馬鹿たれが。」ダニエル・ロブスは、拳でどすんと縦製の円卓を叩いた。コップや陶器が、がたがた揺れた。

「女子供を攻撃する訳にはいかんだろうが！ そうなるかもしれんぞ、フランス軍を多少有利にしてやっとかんと。——同じ兵士の数で攻撃したりするとな。強制募兵隊はフェアじゃなか。問題なのは、そこぞ。フェアじゃなかと言うのも、二通りの意味でじゃ。第一に、人の命令では戦う義務のなか男たちを襲うこと。彼らは、自分の意志でするとなら、戦いに反対はせんのだ。それに、上陸したばかりで、みんな、パンや新鮮な肉やベツトを待ち焦がれとるんだ、それまでビスケットや鯨の頭やハンモックばかりだったけんの。(わしは、感情に訴えとるのではなか。そんな官能とか詩とか感情的なもんに身を任せた事はなか。) 全くフェアじゃなか。急に襲って、息苦しい穴蔵ん中に入れて、削って逃げ出さんように金属で内張りまでして、何年間も海で働かせるなんぞ。第二に、フランス軍にとってもフェアじゃなか。奴らは4人で、やっといギリス軍1人分よ。もし4対4で戦えば、そこにいるシルヴィアや、ビリー・クロクストン坊やを殴るようなもんよ。あの子は、半ズボンをはく年にもなっとらん。これがわしの考えよ。ベル、パイプは何処じゃ？」

フィリップは、煙草は吸わなかった。だから、今度は、彼が話す番だ。ダニエルと話す時は、なかなか話す機会が巡って来ない。ダニエルがパイプを口に銜えた時がチャンスだ。そこで、彼が娘の小指を煙草詰りの代わりに使って、パイプに刻み煙草を詰めた後——シルヴィアは父親のこの癖にすっかり慣れ切っていたから、自分の手を食卓に載せて父親の傍に置く仕草はとても自然で、その自然さは、父親が煙草を燻らせ始める時に、痰壺を取って来る場合と変わり無かった——、フィリップは、自分の考えを整理して、こう言った。

「フランス軍とフェアに戦いたいというのは、僕も皆と同じです。但し、きつと打ち負かす自信があるのならばの話です。自信があるなら、奴らを有利にしておけば良い。僕が思うに、イギリス政府はまだその自信がない。新聞によれば、英仏海峡にいる船の半分は兵員不足です。僕に言えることはただ、国民の事は少しは政府に判断させたらどうか、という事です。政府が、兵士不足で動きがとれん、と言うのなら、国民は、何とかして補ってやらねばなりません。フォスター兄弟は税金で義務を果し、兵隊は兵役で義務を果します。船乗りが、税金も払えず、兵役にも服さないとしたら、義務は強制的に果させなければなりません。強制募兵隊があるのはその為だと、僕は思います。僕としては、フランス軍の振舞いを新聞で読むにつけ、ジョージ王と英国政府に感謝しています。」

フィリップの最後の言葉を聞くと、ダニエルはパイプを口から取り出した。

「わしは、ジョージ王と英国政府の悪口を言った覚えはなかぞ。わしが一番ええと思うように、治めて下されと頼んどるだけじゃ。代議制とはそんなもんと、わしや思うとる。チャムリ氏に投票して、議会に行つて貰うようになったら、わしや言うたも同然じゃ、『当選したからにや、議会で言うて下され。このダニエル・ロブスンが正しいと思うとる事と、このわしがして貰いたいと思うとる事を』とな。さもなきや、誰に投票しても馬鹿馬鹿しいだけだろ。お前さんは思うか。セス・ロブスン（わしの甥で、坑夫の助手しとる）が強制募兵隊に襲われて、そうなりや間違いなく奴の賃金は未払いになるだろうが、そうなって欲しいとわしが思うとるなんて？わしがチャムリ氏を議会に送つたのは、そんな問題を討議して貰う為だなんて？滅相もなか。」ダニエルはまたパイプを手に取り、吸い殻を振り落として、パイプを吹いて火を点け、目を閉じ、フィリップの返答を待った。

「お言葉ですが、法律は国民の福祉の為にあるのであつて、叔父さんや僕などの特定の個人の為にあるものではありません。」

ダニエルはこの言葉には我慢出来なかつた。パイプを食卓に置くと、目をかつと見開いて、真つすぐフィリップを見つめた。言葉に重みを付けようとしたの

だ。それから徐に口を開いた。

「何かと言やあ、国民、国民、と来たもんだ。わしは一人の人間としてここにおる。お前さんも同じだ。だが、国民なんてものはありゃせん。もしチャムリ氏がわしにそんな言い方をしたら、もう氏には投票せん。わしにゃ分かる、ジョージ王もピット首相もフィリップ・ハップバーンもダニエル・ロブスンも。しかし、国民というのは分からん。そんなもんは糞くらえたい。」

フィリップには、時々、賢明とは言えないほど議論を続ける所があつて、間違ひなく自分が優勢だと感じた時が、特にそうだった。それで、彼は気付かなかつた。ダニエル・ロブスンが、知恵を働かせてわざと彼の話に関心を装っていたのに、我慢の限界を越えて、だんだん怒りを漲らせている事に。その憤慨は、問題が、口には出さぬが、人身攻撃の様相を呈して来た時に生じる、あれである。強制募兵隊の任務について、前に一二度論争した事があつたロブスンは、その時の議論を思い出すと、余計怒りが増した。夕べの雰囲気壊さない為には、ここでベルとシルヴィアが台所仕事を止めて、居間に戻って来るのが都合良かった。母娘は、夕食で使つた鍋や鉢を洗つていた。シルヴィアは既に、母親だけにこっそりと、今日買って来たマントを見せびらかしていた。そして、「色がいけない」と言つて首を横に振つたベルに、取り入るようにキスをして、不承不承納得させた。シルヴィアの唇が離れる頃、ベルは娘の縁無し帽を直してやりながら、「これこれ、止さんかい!」と言つたが、不賛成を示す気持ちはもう消えていた。やがて二人は居間に戻つて来て、いつもの手仕事を始めた。これは訪問客が席を立つまで続く。客が帰ると、熊手で暖炉の火を掻き立ててから、寝床に就くのである。シルヴィアの糸紡ぎも、ベルの編み物も、蠟燭の火を使ってまで精を込める程のものでは無かつたし、酪農場では朝は貴重だからである。

ハーブの演奏をさせると、上品な人が余計美しくなると言う。それに反して、糸紡ぎはただの職業に過ぎなくなつてきているようだ。糸を紡ぐ女の人は、羊毛用の大きな糸巻き車の前に立ち、一方の腕を延ばし、他方の手には糸を持ったまま、作業の全容が見えるように、頭を後ろに引く。亜麻用の小さな糸車の場合

——シルヴィアが今宵動かしているのはこちらのタイプである——、動かす際に生じるぶーん、しゅーっという可愛らしい音、手も足も忙しく動かしている紡ぎ手の動作、糸巻き棒の上の亜麻の塊を束ねる明るい色のリボン、このようなものによって、糸紡ぎがまるで一枚の絵画の中で行われているかのようになり、それが醸し出す柔らかさと優美さでは、ハーブの演奏に引けを取る事はない。

霜の降りるほど寒い外気の中を歩いて来た後だったから、シルヴィアの頬は、部屋の暖かさのせいで、かなりほてっていた。市場に出掛けようと帽子を被る前に、髪を後ろで括るのに必要だと思って付けた青いリボンがすっかり緩んでしまって、巻き毛の髪がほつれるままになっていた。二階で鏡を覗いたら、シルヴィアは随分恥ずかしい思いをした事だろう。しかし、自分で気に入る通りの型にはなっていなかったが、彼女の髪はとても美しく豊富だった。糸巻きの踏み木の上に載せた小さな足は、粋なバックル付きの靴にまだ包まれたままだった。靴を履いたまま遠出するのに慣れていなかったシルヴィアには、こうしているのはかなり苦痛だったが、ただ、フィリップが家に送ってくれていたもので、彼女もモリーも裸足になりたくなかったのだ。形が良くて血色の良い脚と赤くなった先細の手が、糸車の動きに調子を合わせて、軽快に亜麻を引きだしていた。このようなシルヴィアの動作の一部始終をフィリップは見る事が出来た。彼女の顔の大部分は、彼から隠れて見えなかった。シルヴィアはわざと顔を背けていた。過去の経験から、フィリップが常に自分を見つめている事が分かっていたので、それが恥ずかしくて厭だったのだ。けれども、いくら顔を背けていても、この間ずっと座ったままのフィリップが、石の床の上で椅子を重そうに引きずる時に出る、耳障りな音は聞こえて来る。シルヴィアは、それを聞きながら心の中がむかむかし、「彼が移動するのは、父さんや母さんに完全に背中を向けてしまわないままで、精一杯私を見れるようにする為なんだわ。」と感じていた。シルヴィアは、フィリップに反抗する機会を今か今かと待ち続けていた。

「ところでシルヴィア。お前がこの真新しいマントを買ったとかい？」

「うん。真っ赤な色でしょ。」

「そうだな。母さんは何と言っとる？」

「もち、良いってよ。」とは言ったものの、シルヴィアの心の中には多少の疑いがあった。だが、何が何でもフィリップに反抗してやるんだ、という気持ちの方が強かった。

「母さんは我慢しますよ。染みが付かなきゃいいけど。実は、どうもそうなりそうな気がしてるとよ。」と、ベルが静かに言った。

「シルヴィアには灰色のを買って欲しかったんだ。」フィリップが口を挟んだ。

「だから赤を選んだのよ。こっちの方がずっと派手だし、遠くからでも私だと分かるでしょ。父さんも、径を曲がってすぐ私が見えた方が良いでしょ、ね？それに、私、雨が降りそうな時には外に出ないわ。そしたら染みも付きっこないわ、母さん。」

「マントちゅうのは、天気の良い日に着るもんだと思うがね。」とベル。「少なくともそれが父さんの承諾を得る口実だったよ。」

ベルは、優しい口調で、そう言った。だが、その時のベルは、優しい母親ではなく、いつもの慎重な母親に戻っていた。いずれにせよ、シルヴィアの方が、ダニエルよりもずっと良く、母親の気持ちを理解している様だった。

「母さん、お前は黙っとれ。シルヴィアは、口実を言うような娘じゃなか。」

ダニエルは、「口実」の意味を正しく理解していなかった。ベルの方がダニエルよりも少しばかり良い教育を受けていた。ダニエルはこの事を認めず、自分の知らない単語をベルが使うと、決まって妻と意見を異にした。

「シルヴィアはいつだって良か娘ばい。だから黄橙色のマントを着なければ、着せてやったらよか。フィリップがここにおるが、彼は法律と強制募兵隊の擁護者だから、娘を喜ばせたらいかんという法律でも見付けてもらおうか。シルヴィアは、わたしたちのたった一人の娘ぞ。母さんは、そんな事考えとらんだろ！」

ベルは考えていた——恐らくダニエルよりもずっと頻繁に。ベルは、毎日、

いや一日に何度も、思い出していた、ダニエルが長期航海で留守にしていた間に夭折した子供の事を。しかし、口答えをするのは彼女の流儀ではなかった。

シルヴィアは、母の心中を父よりもずっと良く理解していたので、話題を変えた。

「そう言えば、フィリップはね、家に着くまでずっと法律を誉めそやしていたわ。私は黙って聞いてて、モリーに相手をさせてたの。でないと、私、絹やレースなんかの話を持ち出してたかもね。」

フィリップは顔を赤らめた。密輸の事を示唆されたからではない。それは皆がやっている事だったし、ただ、それについては口に出さないのが礼儀とされてはいたが。そうではなくて、彼が当惑したのは、自分の言行不一致にシルヴィアが目ざとく気付いていた事が分かったからだった。又、その事実を持ち出す時、シルヴィアがいかにもしてやったりという顔をしたからであった。叔父が、自分の言行不一致を捕えて、「わしに反対して今し方言ってた事と違うじゃなかか。」と言い出すのではないか、と少し考えたからでもあった。しかし、ダニエルはオランダ製ジンのお湯割りを飲み過ぎて、自分の意見を言うのがやっとだった。彼はろれつの回らぬ口で、次のように言った。

「わしあこう思う。法律があるとは、人が人に損害を与えるのを防ぐ為。強制募兵隊と沿岸警備隊はわしの仕事を邪魔し、欲しいものを手に入れられんごとしとする。だから、わしの意見は、チャムリ氏は強制募兵隊と沿岸警備隊を廃止すべき、という事よ。そうする理由がなかと云うなら、^{なにゆえ}何故に奴らが存在するのか、理由を教えてもらいたか。チャムリ氏がわしの頼みを聞いてくれんなら、わしの一票を求めても駄目ちゅう事よ。」

ダニエルの話の途中だったが、ベル・ロブスンが遮った。不愉快な気持ちになったからでは毛頭なく、このまま飲み続ければ夫が何をやらかすか恐れたからでもなく、ただ夫の健康を心配しての事だった。シルヴィアも不愉快になどなっていなかった。父親は勿論、彼女の友人はみんな（酒を飲まないフィリップは例外）、頭が混乱するまで飲むのを当然の事と考えている人ばかりだったから。シルヴィアはさっと糸車を片付けて、寝る準備を始めた。その時ベルが、

ダニエルが飲んでいる時にしか使わない、断固とした口調で言った。――

「さあ、あんた。もう充分でしょ。」

「放つといてくれ！ 放つといてくれ！」と、アルコールの入った瓶をつかんだまま、ダニエルは言った。今日は格別に飲んでいたので、かなり陽気になっていた。もう少しコップに注いだところで、ベルが瓶を取り上げ、戸棚にしまって鍵を掛け、鍵をポケットに入れた。ダニエルは、フィリップにウインクをしながら、言った。

「おい、フィリップよ。妻に指導権を握らせちゃいかんぞ。そしたら夫はどうなるか、見たじゃろ。ところで、わしゃ投票するぞ、チャムリと、――強制募兵隊にな！」

ダニエルは、最後の言葉は大声で言わなければならなかった。ヘップバーンが、叔母を安心させたいと心から願い、自身、体質的に飲酒の習慣を嫌っていた事もある、既に戸口に立って、帰ろうと足を踏み出していたからである。実を言うと、その時フィリップは、シルヴィアの握手の意味ばかり考えていたので、叔父叔母の別れの挨拶などどうでもよかったのである。

第5章 強制募兵隊の話

前章で述べた夕べから二三日間は、天候が思わしくなかった。雨が、急に滝のように降り注ぐのではなく、しとしとといつまでも降り止まず、回りの景色の色を奪い、大気を細かい灰色の霧で満たし、空気よりも水を多く呼吸しているのではないかと思わせる程であった。こんな時には、広大な、姿の見えない海が近くにあると意識すると、余計気分が憂鬱になった。このような天候は、興奮し易い人の神経に作用したのは勿論、神経過敏な人や病気の人にも肉体的な影響を与えた。ダニエル・ロブスンには、リウマチの発作が起きて、表を出歩けなくなった。行動的な性質で、やや頭の鈍い彼のような男には、これはかなりこたえた。彼は、生来怒りっぽい性質ではなかったが、このように家に閉じ込められると、これまで見せた事がない程、怒りっぽくなった。彼は、炉隅

に座って、悪天候を呪い、ベルが良かれと思ってしている日常の家事の凡てが、果して賢明な事なのか、望ましい事なのか、疑わしいと思った。ここヘイターズバンク農場では、「炉隅」というのは、文字通り、暖炉の中の壁際の隅、を指した。炉の左右両側から部屋の中に約6フィート〔約1.83メートル〕の長さの壁が突き出しており、頑丈な木製の長椅子が片方の壁の前に置いてあった。もう一方の壁の前には、丸い背当ての付いた「主用の椅子」^{あるじ}が置いてあり、座席部分は四角い木で出来ていて、上手い具合に、中央部を少し削ってへこませてある上に、四隅の一方が前に来るように取り付けてあった。炉火の上で行われる作業を凡て見れるこの椅子に座って、ダニエル・ロブスは四日間もの長い間、ジャガイモの煮え具合やスープの作り方などの細かい事について、妻に助言したり指示したりした。このような仕事はベルが特に自信を持っているものであって、ヨーク全州で一番料理の腕の良い主婦からの助言でさえ、彼女は受け入れなかつただろう。それでもベルは、何とか口を噤み続け、「放つてよ。さもないとお尻に針でふきんを留めるよ。」と、言わずに済ませた。女の人や、夫以外の男の人、にだったら、言ってしまった事だろう。彼女は、シルヴィアが冗談交じりで言おうとした、「父さんの知ったか振りの指示に従ってみて、結果をすぐ目の前に出してやったら。」という提案さえ、喋らせなかつた。

「だめだめ。父さんは一家の主よ。^{あるじ}敬わんといかんわ。それにしても、困ったことね。家の中に男がいて、火を絶やさんように番をしているなんて。しかも、こんな天気の日におまけに、誰一人訪ねて来んわね。父さんと口論することになっても良かとお。お前と私は口論の相手になつたらだめ。聖書の教えに反するけんね。相当長い口喧嘩をやってくれれば、父さんの役に立つよ、血の巡りが良くなつたりするしね。フィリップが来てくれたらねえ。」

そう言ってベルは溜息を吐いた。この四日間というもの、彼女は、慰めようのない夫を慰めようとした、あのマンテノン夫人〔1635-1719；ルイ14世の2度目の妻〕の苦しみを幾分なりと経験していたのだ。しかも、夫人ほど話の種もなかつたのに、である。ベルは、善良で分別はあつたが、話題の豊富な女で

はなかった。シルヴィアの企ては、母の目には不孝な計らいに見えたが、ベルが静かに気を遣いながら日常の家事を繰り返すよりも、ダニエルの為にはなった事だろう。たとえ、それで彼を怒らせる事になったとしても。ベルの単調な仕事は、ダニエルが家を留守にしている時には彼に安らぎを与えてくれたが、家に居る時には不快の種となった。

シルヴィアは、フィリップが父の相手をする面白い人物に扮してこの家にやって来るといふ考えを嘲笑した挙句、「信頼の置ける立派な青年を馬鹿にした。」と、母親を怒らせてしまった。ベルは、フィリップこそ青年男子のあるべき鑑であると言つて、尊敬していたのである。シルヴィアは、母を苦しめた事に気付くとすぐ、悪意ある冗談を言うのを止め、母にキスして、「私に任せて。みんな上手く片付けるから。」と言ひ残し、奥の台所を走り抜けて行った。母娘は、さっきまでそこで、金属製の大きな牛乳罐やバター作りの木製用具一式をごしごし洗っていたのだつた。ベルが娘の美しい容姿を眺めていると、シルヴィアは、走りながらエプロンを頭越しに被つて、窓の外を通り過ぎた。その窓の下で、ベルは酪農用具を洗っていた。彼女はちょっとの間仕事の手を休め、自分でも気付かないうちに、「神様の祝福がシルヴィアにありますように。」と、呟いた。それから、既に雪のように白くなっている用具をまた磨き始めた。

シルヴィアは、霧雨に濡れながら、でこぼこの庭を走り抜けて、ケスタがいると思つた場所にやって来たが、いなかったのだから、後戻りして牛小屋まで行かねばならなかつた。真つすぐ壁に固定した粗末なはしご段を昇つてから、彼女はケスタをびっくりさせた。恰度、彼が羊毛置き場に座つて、自宅で紡ぐ為に蓄えられた羊毛を見渡していた時に、青い毛織のエプロンで包まれたシルヴィアの明るい顔が、跳ね上げ戸からひょいと出て来たのだから。こうして頭だけ見せたままで、シルヴィアはケスタに話し掛けた。彼は家族同然であつた。

「ケスタ、父さんが、退屈の余り、疲れていらだつてるもんね。暖炉の横に座つて両手を前に組んで、手持ち無沙汰にしとるもん。母さんと私じゃ、どうやったら父さんを笑わせたり、がみがみ言わせんで陽気にさせたり出来るか、全然考えつかんもんね。だから、ケスタ、ちょっと出掛けて行って、裁縫師の

ハリー・ドンキンさんを見付けて、ここに連れて来てくれんね。マルティヌス祭〔11月11日；英国では四季支払い日の一つ〕が近いし、この辺りにも巡回に来ると思うよ。そしたら、一番に来てもらった方が良いし、父さんの服には、繕わんといかんものがたくさんあるわ。ハリーさんならいつもニュースをたくさん持ってるとし、少なくとも、父さんの口論の相手にはなると思うわ。しかも、新しい相手だしね。とにかく、それが、多かれ少なかれ、私たちみんなの為になるというわけ。だから、行って。いつものケスタ爺やのように。〕

ケスタは、シルヴィアの父親思いを称賛する眼差しで彼女を見たが、その目には優しさと忠実さが籠っていた。彼は、ダニエルが出て来ない間にやっておくべき今日の分の仕事を自らに課していて、是非それをやってしまいたかった。しかし、どういう訳か、シルヴィアに逆らう事など夢にも思った事はなく、それで、事情を説明するのがせいぜいだった。

「道具に泥がたくさん付いとるけん、きれいにしようと思っと思ったんじゃが。けど、シルヴィアさんの頼みは聞かんといかんのう。」

「それでこそケスタ爺やよ。」そう言うと、シルヴィアは微笑んで、エプロンで包まれた頭で頷いた。それから頭を下げてケスタの視界から消えたが、また上って来て（シルヴィアの消えた箇所を、ぼんやりと見つめたままでいたケスタに）言った。「ねえ、ケスタ、慎重に賢くやってね——必ずハリー・ドンキンさんに言ってね、こちらから呼びにやった事を漏らさないように、って。巡回中で、家に一番^{うち}に来たような顔をして入って来て下さい、って。繕う着物はありますか、って父さんに尋ねてもらったら、保証するわ、ハリーさん、きつと大歓迎を受ける。賢く抜目なくやって、いいわね。」

「単純な人間相手なら、わしでも、賢く抜目なくやれるよ。じゃが、ドンキンがわしと同じくらい抜目なかったら、どうしたらええんじゃ。奴あ、多分そんな人間ばい。」

「早く行って！ ドンキンさんがソロモンなら、ケスタはシバの女王よ。私、請け合うけど、結局は女王の方がソロモンより知恵があったでしょ。」〔列王記 I 10：1-13；歴代誌 II 9：1-12〕

ケスタは、自分がシバの女王であると考え、おかしくて長い間笑いを抑える事が出来なかった。彼の大きな笑い声は、シルヴィアが母親の傍に戻る頃まで続いた。

その晩、部屋に付いている小部屋でシルヴィアが恰度寝る用意をしていた時、何か当たって窓ががたがた言う音が聞こえた。小さな開き窓を開けると、下にケスタが立っていた。彼は、笑って、先程話が途切れた所から話を始めた。

「は、は、は！シバの女王様の登場じゃ！ドンキンを取り込んだぞ。奴あ明日来るばい、ちょっと失敬して、ついでに仕事ももらいに。どうも仕事を恵みと考えるとるごたる。爺さん、初めは、ちと渋っとったが、どうも、クロスキイさんとこの農場で仕事をもらっとったごたるもん、町の向こう側のな、1ブッシュェル半〔1ブッシュェル=35.67リットル〕のビール付きでな。大概の家じゃ、1ブッシュェルがせいぜいよ。それで、なかなか『うん』と言わんのじゃ。でも、心配せんでよか。ちゃんと来るけん。」

誠実な男だったケスタは、シルヴィアの望みを叶えてやろうと思って自腹を切って払った1シリングの事は、一言も言わなかった。彼は、それで、裁縫師にビールを諦めさせたのだ。シルヴィアの望みを叶えて戻って来たケスタは、自分の不在が気付かれて、明朝叱られる事になるのではないかと、しきりに不安がった。

「旦那様は怒っとられんだったかのう、わしが夕食に来んかったけん。」

「『ケスタは何しよっとかい？』と、ちょっと聞いたけど、母さんは知らないし、私は黙ってたわ。ケスタの夕食は、母さんが牛小屋の二階に持って行ったよ。」

「なら、食いに行こかね。わしゃ、風を出したふいごの様に腹べこだよ。左右がくっ付いて、中が萎んでしまうじゃろ。わしのおなかと背中もくっ付きそうじゃ。」

次の朝、シルヴィアの顔はいつもより少し赤らんでいた。愈々、ハリー・ドンキンのがに股脚が、弧を描くように小径を下って、家の戸口に向かって来たのだ。

「あら、ドンキンさんじゃないか。間違いないわ。」シルヴィアよりも僅かに遅れて、彼の姿を見付けたベルが叫んだ。「全く運がいいわね。これで、あの人があんたの話し相手をしている間に、シルヴィアと私はチーズを掻き混ぜられるわ。」

ダニエルに言わせれば、これは妻の科白としては、余りにも露骨過ぎるものであった。特に今朝は、リューマチがいつもよりづきづき痛むだけに余計そう思った。それで、彼の返答は厳しかった。

「女はみんなそう言うただけん。女にとって大切なのは『話し相手がいること』で、男も女と同じだと思っとる。わしゃお前に知ってもらいたか。わしだって頭の中じゃ色々考えとる、ただそれを人前にさらけ出したくなかだけじゃ、という事実をな。わしには瞑想する時間もうなつた、結婚してこの方な。いや、少なくとも、船乗りを止めてからじゃ。船の上じゃ、声の届く範囲にゃ女はおらんからな。特にマストの上では、よう瞑想出来た。」

「なら、ドンキンさんには家^{うち}は間に合ってます、と言った方がいいかなあ。」と、シルヴィアが言った。彼女は、説得したり反駁したりするよりも同意した方が、父親の気持ちを操作出来ると直覚的に悟っていた。

「ま、そこまですんな。」と、ダニエルは、体を捻りながら言った。話し相手は不要との自分の意見に素直に同意して、シルヴィアがドンキンを追い返してしまいはしないかと不安になったのだ。「うっ、いてて。」と、手足が痛んで、思わず口から洩れる。「入ってくれ、ハリーさん、入ってくれ。ちょっと分別のある話を聞かせてくれよ。わしゃ、四日間も女どもと一緒に家に閉じ込められとつたんで、男か女か分からんごとなつてしもうた。心配せんでよか、女どもが修繕せんといかん服を持って来るけん。自分たちで出来る程度にしか綻びとらんかもしれんが。」

こういう訳で、ハリーは外套を脱ぐと、急いで片付けられた食器戸棚の上に、職業意識の出た腰掛け方をした。低い位置にある長い開き窓から入る光線を全部受けられるように腰掛けたのである。それから、指抜きの中に息を吹き、指を舐めた。指抜きが外れないようにする為である。それから辺りを見回して、

会話のきっかけを探した。その間、シルヴィアとベルは、引き出しや収納箱の蓋を開けたり閉めたりして、やっとの事で、修繕しなければならぬものや、修繕した方が良く互いに感じたものを見付け出した。その音は、ドンキンの耳に入っていたかもしれない。

「女ちゆうものは、現状に満足するもんじゃ。」と、ダニエルは哲学者ぶって言った。「だが、男には数えきれん程の夢がある。それなのに、このわしを見い。脚が動かんまま四日間ぞ。あんたにや敢えて言わしてもらうが、雨ん中で牛の糞でも積んどった方がずっとましぞ。わしがこげん疲れるのは、回りに女しかおらんけんばい。女どもは、あんまり馬鹿んごたることばっか言うけん、まるで骨にこたえるもん。あんたは全くの男とは言えんが〔「裁縫師は九人集まらないと一人の男とは言えない。」という諺を踏まえた科白〕、でもありがとさん。裁縫師だつて有り難かもんばい、女しかおらんだつた後はな。まあ、見とつてみい、余りの馬鹿さ加減に帰りたくなるけん。あれ、おい、そがんとくさん服ば持って来てから、誰が修繕代ば払うとかい？」こう言ったのは、ベルが両腕一杯分も服を持って降りて来たからである。彼女は、夫の質問を真に受けて、いつも通り正直に答えようとしたが、シルヴィアが、父の声の調子に明るさが戻った事に素早く気付いて、母の後ろから叫んだ。

「私が払う、父さん。木曜日に買った新しいマント〔第2章には、「市が立つのは水曜日」とある。矛盾。〕を売るつもりよ、父さんの古いコートとチョッキを修繕する為に。」

「聞いたかい？」ダニエルは笑いを抑えながら言った。「シルヴィアはまだ子供ばい。ここ三日間、頭ん中は新品のマントのことばっかしだつたくせして、もう売りたいとぬかしやがる。」

「おはよう、ハリーさん。この古い服をみんな新品同様にしてくれるのに、父さんが代金を払わないと言うのなら、私がすぐ新品の赤いマントを売って、未払いで帰らせるような事しないからね。」

「どうも、わしにや不利な取引のようじゃのう。」 鋭いプロの眼で目の前の服の山を見ながら、ハリーは言った。それから、一番生地の良い品を取り出

して、よく調べた後、こう言った。

「やはり、金属のボタンが付いとるね。絹織りの職人たちが、大臣連中に、絹のボタンを奨励する法律を作るよう、請願しよったぞ。聞くところによると、金属ボタンを捜し出すスパイが暗躍しとって、それを身に付けとる者を見付けたら、法廷に引っ張って行くちゅう話ばい。」

「わしゃ、それば着て結婚式を挙げたし、死ぬまでそれば着る。でなかなか、何も着らん。法律ばかり作りよると、今にわしの眠り方まで干渉さるっばい。ひと厭かく毎に税金ば取らるっごとなる。糸巻きにも、食べ物にも、それに付ける塩にまでも税金を掛けて来た。お陰で、塩はわしが子供ん時の値段の半分以上高うなっとなる。全くおせっかいな人たちばい、立法府の連中というのは。ジョージ王が係わつとられるなどとは信じられん。だから、ええか、よく聞けよ。わしゃ真鍮ボタンの服を着て結婚式を挙げたし、死ぬまでそれば着る。それでわしが死刑にでんなるなら、わしゃ墓ん中でもそれば着るぞ！」

ダニエルがここまで話す間に、ハリーは服の修繕をどういう具合に進めるか、ロブスン夫人と打ち合わせを済ませていた。「ここはこうして欲しいとだけど。」「分かりました。」などという事を、身振り手まねでやったのである。既に、ハリーの糸は飛ぶように速く動いていた。ベルとシルヴィアは、ここ数日間思うように出来なかつた自分たちの仕事に、これで自由に打ち込める、と感じた。と言うのは、ダニエルが（いつもパイプを入れている）暖炉横の壁の四角い窪みから、パイプを取り出したからである。話の合間にゆっくりと煙草を燻らせる時間を取る用意を、したからである。これは、良い徴候だった。

「ほら、この煙草ば見てみい。こいつあ骨折って手に入れただけのことはあるばい。ある女のコルセットに分らんように縫い付けられて、陸に上がって来たぞ。向こうの湾に停泊しとる小型帆船にいる奥さんたい。あの人は随分痩せとったもんな、乗船した夫に会いに行った時や。じゃが、戻って来た時や、随分肥えとった。体のあちこちにたくさん物ば入れて来たとたい。煙草の他に。しかも、沿岸警備隊や給仕船なんかに出くわしたが、酔っ払いのふりをしたそうなの。それで、みんなその奥さんを罵って、係わらんようにしたらしか。」

「給仕船と言やあ、今週モンクスヘイヴンで強制募兵隊と一悶着ありましたなあ。」と、ハリー。

「ああ、それについちゃ、娘が話しよった。しかし、情けななことじゃが、女に話をさすつとろくなことはなか。——ただ、娘のために言うておくと、シルヴィアはとても頭の良か娘じゃあるが。」

とは言ったものの、本当の事を言うと、シルヴィアがモンクスヘイヴンでの出来事について情報をたくさん持って帰って来た時に、ダニエルはその事件について露骨に好奇心を示すのをためらった。そうする事は、男の誇りを捨てる事のように感じたのである。彼はその時思った——「明日、町に行く用事は見付けよう、その時、仕入れられるだけの情報はみんな仕入れる事ができる。そして、色々質問して女を得意がらせんでも済む。そんな事をする、あたかも女の言う事に興味を覚えとるかのようによい誤解されるもんな。」と。家の中では、全知の神ジュピターのように、女に教えられずとも何でも知っておきたい、という強い思いが、彼にはあったのである。

「モンクスヘイヴンでは相当な混乱が起きてなあ。みんな給仕船のこたあすっかり忘れとった。本当に静かに停泊しとったし、アトキンソン大尉は、船に入り用なもの全部をかなりの高値で買うてくれとった。ところが、木曜日に、レゾリューション号が、今シーズン最初に戻った捕鯨船だがな、そいつが入港すると、強制募兵隊が牙を剥き出して、強壯な船乗りを四人連れ去ってしもた。みんなわしがズボンを作ってやった者ばかりたい。それで、町の真ん中に入ったら、蜂の巣をつついたような騒ぎじゃった。みんな気違いみたいに興奮し、血気に逸って歩道の敷石をほじくり返しかねごたった。」

「わしがそこにおればなあ！ほんにそう思う。積もる恨みがあるんじゃ、強制募兵隊には。」

ダニエルは（人差し指と親指が切れて使いものにならなくなっている）右手を上げた。それは、威嚇する気持ちを表す為であったし、また、兵役を逃れる為に被った苦しみの証を確認する為でもあった。強制された兵役だったから憎悪した。彼は顔付きがすっかり変わって、決して消えない、情け容赦のない怒

りの表情をした。今、自ら吐いた言葉が喚起したのだ。

「続けてくれ、ハリーさん、話を続けてくれ。」ダニエルは苛立った。ドンキンが、もっと手際良く仕事を進める必要に駆られ、少し間を置いたからである。

「待て、待て。そのうちにな。話はまだまだ続くとだけん。それに、誰か連れて来て、アイロンで縫目の皺を伸ばしたり、端切れを探してくれんと困る。この家じゃ、役立たずしかおらんけんのう。」

「端切れなんか、どがんでんよかじゃなかか。おい、シルヴィ！ シルヴィ！ こっちに来て、裁縫師の助手ばせい。そして、はよ、この男の言う通りにしてやれ。わしゃ、話の続きば聞きとうてたまらん。」

シルヴィアは、言われた通りに、焼き鑊こてを暖炉の火の中に入れると、二階に駆け上がって、慎重なベルがこんな時の為にと置いて置いた包みを持って来た。それには、様々な色の端切れが入っていた。服を着古してしまったり、一部がまだ丈夫で儉約家の主婦には捨て切れないような場合に、古くなったコートやチョッキ等から切り取ったものである。ドンキンが、布の柄を選んで、どう繕うか頭の中で決めているのを見ていると、ダニエルはだんだん腹が立って来た。

「どうも……」と、業を煮やして彼は口を開いた。「わしゃ、女に求婚しに行く若者のごたるなあ、あんたがわしの着古しに合う布地を骨折って探しとるのを見とると。真っ赤な継ぎ当てでも構わんぞ。指で針を動かすだけのうて、舌で話を進めてくれしゃがすると、本当に何色でんよか。」

「さて、今言うた通り、モンクスヘイヴン中が蜂の巣をつついたような騒ぎで、皆があちこち走り回り、わいわいがやがや、それはもうひどい状態ばい。めいめいが蟹はりを出して、いつでも怒りと復讐の毒を出す用意をしとる感じじゃ。女たちが通りで泣き喚いとった土曜日、可哀相に、最悪の事態が起こったんじゃ。金曜日は、グッド・フォーチュン号が戻って来るとじゃなかどかという期待と、戻って来なかった失望とで終わってしまった。レゾリューション号が入港した木曜日に、水夫たちが『グッド・フォーチュン号は今セント・アー

ブズ岬沖にいる』と言いよったけんの。主婦や娘たちが、大方その船に夫や恋人が乗っとるんじゃろうて、頭から目ん玉が飛び出るほどに、じっと北の方を見つめとった。海は、雨で一面霧がかかっとたがの。午後の満潮時になっても、船の輪郭一つ見えんけん、給仕船を恐れて入港を遅らしとるのか（給仕船も姿が見えんごとなつとったけんの）、あるいは進みよるのか、分からんごとなつた。女たちは、可哀相に、ずぶ濡れになって、スカートを引きずって、自分の家に戻って行った。すっかり意気消沈して、いつまでん泣きよる者もおつたし、風の中を頭を伏せて歩き、誰も見ずに、誰にも話し掛けずに、真つすぐ家に帰る者もおつた。みんな戸締りをして、緊張して、もう一晚、ひたすら待つだけの夜を過ごしたんじゃ。土曜の朝——ええかい、土曜の朝ばい、そりゃあ風の吹き荒れる、ひどい天気の日だったが——、夜明けにはみんな波止場に立って、精一杯目を見張つとった。そしたら、満潮時に、砂州の向こうにグッド・フォーチュン号が見えたんじゃ。間接税担当官が舟で近付いて戻って来た時に、捕鯨船の様子を皆に知らせた。鯨油と脂皮を満載しとったが、旗は、雨にしまれて、マストの半分までしか揚がつとらんだつたそうじゃ。哀悼の意を表すようにな。甲板には遺体が一体あつたそうじゃ。夜明けまでは、ぴんぴんしとつたのにな。更に、生死の境を彷徨いよるのが一人いて、行方不明の七人はみんな募兵隊に連れ去られたとのこと。噂に聞くフリゲート艦〔1750—1850年頃の、上下の甲板に28—60門の大砲を備えた三本マストの木造軍艦〕がハートゥルプール沖において、木曜日に強制募兵を実施した給仕船から情報を得たんじゃ。オーロラ号は（それがフリゲート艦の名前じゃ）、北に針路を取つた。セント・アーズ岬沖9マイル〔約43.2キロ〕の地点で、レゾリュション号はフリゲート艦を確認し、造りを見て知つとつたんじゃな、それが軍艦である事を察知し、強制募兵するつもりばいなど推測したんじゃ。わしは、重傷を負つて死にかけとるという男を、この目で見て来た。奴は生きる、きっと生きるばい！この男のように強い復讐心を胸に秘めておりながら、死んだ者はまだおらん。男は殆ど口がきけんだつた、かなり銃弾にやられとつてな。だが、顔色が赤くなつたり青くなつたりするんじゃ、一等航海士と船長がわしらに、オーロ

ラ号が発砲して来た様子や、グッド・フォーチュン号が、抵抗せんで、船舶旗を揚げた様子などを語る時にな。旗が完全に揚がってしまう前に、次の砲弾が横静索よこせいさく（マストの頂から両船側に張った支索）をかすめ、捕鯨船は、風上におったもんだから、フリゲート艦にどンドン近付いて行った。フリゲート艦は老獺で企みを抱いとる事は分かっつたから、鋸打ちのキンレイドは（死にかけとる男の名前はそう言うんじゃが、ただ、奴は死にゃあせん、間違いなか。）、水夫たちに、『甲板の下に降りてハッチをしっかりと閉めとけ』と命ずると、彼らを守ろうとして、船長と年老いた一等航海士と一緒に、甲板上に残り、オーロラ号からボートに乗って近付いて来る連中に、手初めにかすり傷でも負わせてやろうと構えとった。その時、軍艦式の規則正しい漕ぎ方で、ボートがこちらに近付いて来るのが見えたんじゃ。」

「糞つたれめ！」ダニエルは、声を潜めて、独り言を言った。

シルヴィアは、立ったまま焼き鑊を手に持ち、熱心に耳を傾けていた。ドンキンに焼き鑊を渡すと、話を途切れさせてしまうのではないかと思ひ、かと言ってそれを火の中にくべ直すと、彼に仕事の途中である事を思い出させてしまひはしないかと思つて、それも出来かねていた。ドンキンは今裁縫の事など忘れ、ひどく自分の話に熱中していた。

「さて、奴らは海上を進んで来て、どすんと大きくバウンドして、捕鯨船に横付けした。舷側をイナゴの様に上つて来て、全員武装していた。船長が言うには、キンレイドが鯨用のナイフを防水シートの下に隠すのを見たそうじゃ。船長には、キンレイドが覚悟を決めているのが分かつたんじゃな。『言葉で言つても、奴は止めんだつたらう』て言いよつた。『鋸打ちに、鯨ば殺すなて言うても、止めんのと同じ感じだつた』と。オーロラ号の海兵が乗船すると、その中の一人が舵を取りに走つた。船長は、そんな時、目の前で我が妻が接吻されるような気がしたそうじゃ。船長は言うた。『だが、私はハッチの下でじっとしている水夫たちの事を考へた。それから、今この時にも私たちを待つとる、モンクスハイヴンの人々の事を思つた。それで、自分に言い聞かせたんじゃ、出来るだけ丁寧な話そう、キンレイドが覚悟しとるだけに余計そうせねば、とな。

私には、黒い防水シートの下で、鯨用ナイフがきらっと光るのが見えたんじゃない。』それで、船長はとても丁寧な対応をした。その間、船とオーロラ号の距離はどんどん近付いていた。それから、海軍大佐がらっぱを吹き、大きなひどい音を出して船長を呼ぶと、『乗組員を甲板に整列させろ』と命じたそうじゃ。船長が言うには、ハッチの下の水夫たちは、血を見ずに降参するものか、叫んどったそうだし、キンレイドがピストルを取り出して、慎重に弾を込めよるのが見えたそうじゃ。それで、船長は海軍大佐に言うた。『私たちは、法律で保護されて、グリーンランドで鯨を取る漁師です。ですから、あなた方には、私たちの邪魔をする権利はありません。』しかし、大佐は余計怒鳴って、『乗組員を甲板に整列させろ。奴らが従わんのなら、お前は、船の指揮権を失ったんだ。船は、部下による上官抵抗状態にあると見なす。お前と、お前に従う意志のある者は、オーロラ号に乗り移れ。その後、残りの者に発砲する。』これが、奴の魂胆ぞ。船長がグッド・フォーチュン号を指揮出来んごとなったけん、自分が助けてやった事にするつもりだったとばい。しかし、我がグッド・フォーチュン号の船長は、それに従うような意気地無しじゃあなかつた。『船は、鯨油を満載しています。砲撃したらどういう事になるか、言わずもがなです。海賊と思われようが思われまいが（「海賊」呼ばわりされた事が、船長の頭に來とったんだな）、私は正真正銘のモンクスヘイヴン生まれです。グリーンランドから航海して來ましたが、そこは巨大な氷河と、死に瀕する危険が数多くある所でした。有り難い事に、強制募兵隊とは一度も遭遇しませんでした。でも、あなた方がそれなのですね。』そう言うたと、船長はわしに言うんじゃないが、実際それほど堂々と口に出して言うたのか、わしには、ちと心もとなかつた。頭の中に用意しておっただけで、結局、慎重に行つた方がええ、という気持ちの方が勝つたのかもしれん。船長は、何があつても積み荷を無事所有者の元に運べるようにと、心の中で祈りよつた、と言ひよつたけん。さて、グッド・フォーチュン号に乗り込んだオーロラ号の海兵たちは、『ハッチを弾丸で吹き飛ばして、中から引きずり出しても構わんか?』と怒鳴つた。船長の話によると、キンレイドはハッチの上に立ち、ピストル二丁を手にし、他にも武器を何か隠し

持っと思った。奴は、命は惜しくなかった。独り者だったけんの。けれどハッチの下にいる者は皆、妻子持ちだったんじゃ。奴は、最初にハッチに近付いて来た二人の男を、あの世に送った。それから、近寄って来た男を二人、狙い撃ちしたそうじゃ。そして、身を屈めて鯨用ナイフを取ろうとした、恰度その時の事じゃ（鯨用ナイフたあ、小鎌ほどの大きさなんじゃが）……」

ここで、「そんなことを一々説明すんな。」と、ダニエルが大声を出した。「わしあ、鯨取っと思ったんじゃ。」

「海兵たちの撃った弾が、キンレイドの脇腹を貫通したんじゃ。めまいがして倒れると、海兵たちは死んだと思って、蹴って脇へどけた。それから、ハッチに向けて発砲し、一人を射殺し、二人を負傷させた。すると、残りの者は、助けてくれ、と叫んだんじゃ。命は惜しいもんばい、捕虜になった方がええ。こうして、オーロラ号は、負傷した者も、元気な者も、皆運び去ったわけじゃ。残されたのは、死んだと思われたキンレイド（実は死んどらんじゃった）、同じくダーリィ（こいつは本当に死んどった）、それに、船長と一等航海士（年取り過ぎて、使いものにならんかったとじゃな）。船長は、キンレイドを弟のように大切に思っと思ったけん、ラム酒を飲ませ、包帯をしてやってから、体の中に残ってる弾を取り出してもらおうと、モンクスヘイヴン一の医者呼びにやった。北極海中探しても、彼ほどの鉋打ちはおらんそうじゃ。この目で確かめたところ、確かに彼は好青年じゃった。衰弱と出血の為に、体を動かさんで、青くなって横になっと思ったがの。ダーリィの方は、びくとも動かんかった。モンクスヘイヴンでは前代未聞の規模の埋葬式が、今度の日曜日にあるそうじゃ。さあ、焼き鏝を渡して下され、娘さん。これ以上無駄話は止すとするか。」

「無駄話なんかじゃなか。」ダニエルは、椅子の上で体を動かそうとした。が、思うように動かず、今更のように自分の無力さを感じるばかりだった。「わしが昔のように若ければ——いや、今でも、このひどいリューマチさえ無ければ、——募兵隊の連中に、強制募兵など無駄なことはすべきじゃなか、と教えてやっとなあ。全く、わしの若い頃の対米戦争の時よりか悪かもんな。尤も、当ても相当強制募兵はしよったが。」

時間をかけてドンキンの話を十分理解してから、長い溜息を一つ吐いて、「キンレイドはどうなったの?」と、シルヴィアが聞いた。話の進行中、シルヴィアの頬はほてり、目は輝いていた。

「大丈夫だ。死にゃせん。生命力がまだ残っとる。」

「その人、モリー・コーニィの従兄だと思うわ。」と言うと、シルヴィアは、「キンレイドは自分にとって従兄以上の人なの。」とモリーが仄めかした事を思い出し、顔を赤らめた。そして、すぐにでも彼女に会いに行き、もっと詳しい事を聞きたいと思った。女にとっては、この手の話は、同姓に話すのであれば、品を落とす事にはならないのだ。以来、シルヴィアは、この事ばかり考えるようになった。しかし、このような目的でモリーに会いに行く事は、自分でも認めかねた。ただ、シルヴィアは、ひたすらモリーに会いたかったから、それは、マントの型をどうしたらいいか、彼女に相談する為であると、自分に信じ込ませた。マントは、ドンキンが裁断して、彼の指示でシルヴィア自身が作る事になったのである。結局、「マントの型を相談したい」、それが、その日の仕事が終わった時にシルヴィアが母親に告げた、モリーを尋ねる理由だった。夕方、曇った湿っぽい空には、陽光が漏れていた。〔第6章に続く〕